

2022年度イスラーム信頼学全体集会「対立と紛争のなかで、つなぐ」

参加報告記

京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科 5年一貫制博士課程

中鉢 夏輝 (ちゅうばち なつき)

「辻先生のコメントから、場の雰囲気が変わった」

全体集会の終了後に誰かが話していたのを耳にした。私もそう思った。コメントのなかで、辻信一先生は始終「間 (あいだ)」について話していた。間は、何かを曖昧にする。この間 (あいだ) は、意味の限定をしない。人間・時間・空間という単語のすべてに「間」という文字がついている。しかし、人・時・空に、間の字がついていても、いなくても意味上の大きな変化はない。辻先生は、この無意味さに本質を見出した。この間という言葉に込められた曖昧さこそが、いまの地球社会に求められている、と辻先生は強調した。

討論前の4つの報告からは、現代の移民や少数民族が自身の立場・感情の「重心」を常に移している様子が、それぞれ具体的に把握できた。しかし、これらの事例から、「人はどのようなコネクティビティをもって関係と信頼を構築していく」べきなのか、共通する答えが思い浮かばなかったため、辻先生がこれらの事例をどう総括するのかモヤモヤしていた。

辻先生は間 (あいだ) の観点から、これらの事例、エコロジーの問題、そして昨今のウクライナ侵攻をぐいっと引き付けた。ロシアかウクライナのどちらかに属することを強いる戦争も、境界線を引くことを是としたレバノンやパレスチナでの対立も、自己と他者の間 (あいだ) を往来する曖昧さに付き合い、耐える能力を失った人々が起こした悲劇なのである。

コメントに対して山根聡先生は、イスラーム信頼学が分断を乗り越えることを目的としており、「間を広く捉えずに考えていた」と返答した。間を広く捉えること、それは言葉遊びのようにも見える。それは悪いことではないように思える。黒木先生や昔農先生も自身の調査地で使われる様々な「間」の見方を紹介した。想像力の拡張はこのようにして起きるのかもしれない。

ところで、この「あいだ」の話聞きながら、私は環境社会学者の福永真弓が『サケをつくる人びと』(2019年、東京大学出版会)で語る「間 (あわい)」の思想を思い返していた。本書が扱う岩手県宮古湾の人々とサケは、資源化、漁業、人工ふ化放流と段階的に関係性を変化させてきた。その過程で、サケは野生と家畜の間を往来する、間 (あわい) の状態にあった。福永氏の問題意識は、この間 (あわい) から脱出しようとする現代社会にある。つまり、現代の人間はサケを人間による支配/管理の範疇内・外に両極化し、連続性を捨てようとしているのである。これは、裏を返すと、人間という存在の抽象性も捨てることにもなる。

さて、私は「環境配慮型モスクとハリーファ概念の結びつきから見るイスラーム環境倫理の多様性」というタイトルでポスター報告を行った。ここでは、ムスリムの宗教実践は法規定や政治だけでなく、物理的環境ないし物質的条件によっても左右されており、その関係に目を向けることが今後重要になるだろうと主張した。その見方の意義は何なのか、報告の場ではうまく言語化できなかつた。いま振り返ると、ムスリムとしてのあり方をぼかそうとする人々の創造的な取り組みに惹きつけられていたのかもしれない。いわずもがな、これらの気づきは、彼らが人と自然の間 (あいだ/あわい) を生きること、それに気づく視点があつてのものである。